

いじらしくてかわいい恋人が、
もしもタガを外したらどうなるのか見て
みたかったので、大量の媚薬盛って我を
忘れさせてみます

興味で突っ走る系暴走攻め大学院生×攻めの被害に合いつつ頑張る受け大学生

攻め：宗佑（しゅうすけ）

受け：真一（まいち）

要素：媚薬、前立腺責め、騎乗位、おねだり、結腸責め

同じサークルに入っていたことがきっかけで付き合うことになった恋人の真一は、自分から告白してくる積極性をもっていながらも、どこかで自分を抑える癖があると思う。おそらくそれは我慢して控えているのではなく、年上の俺についてこようと気を遣っているからだ。俺が好きだからこそ、頑張って背伸びしている感じはかわいい。けれど、大人びたい心が夜の営みの時にも出てしまうのが少し物足りない。真一はそこまで性行為に慣れているわけではないようで、実は結構恥ずかしがりだ。でも俺としている時、無理して恥ずかしくないフリをしているのだ。最初の方はそんな真一もかわいいと浮かれたものだが、慣れてくると欲

ができる。今は理性で様々なコントロールをしている真一が、タガを外したらどうなるんだろうか。

このような疑問が出てくると、どうしても実行に移さないと気が済まなくなった。しかしながら本人に直接、ありのままの真一をさらけ出してくれ！と言ったところで、引かれるのがオチだろう。ならば、あくどい手段だが文明の利器を使おうじゃないか。幸いにも院の研究室には、俺と同じような考えを持つ者同士が多くいたため、院生の知恵を結集させて、強力な媚薬を作ることに成功した。あとはこれを、こっそり真一に飲ませるだけだ。

「ただいま。夜涼しいけど、歩くと暑いや」

「おかえり。急に暑くなったもんな。冷蔵庫に麦茶あるから飲んだら」

「本当！？嬉しい、いっぱい飲んでもいい？」

「お～、全然いい。飲め飲め」

どうやったらスマートに媚薬を飲んでもらえるかを考えた結果、俺は近頃の気候を利用する作戦に出た。約800ミリリットルほど入るポットに麦茶を作り、そこに大量の媚薬を投入する。歩いてバイト先から帰ってくる真一は、初夏の暑さを吹き飛ばすそれを喜んで飲むだろう。期待通り、何の疑いもなくコップ2杯近くを一気に飲んでいた。ガブ飲みだ。素晴らしい。これで100%許容量を超える媚薬が彼に取り込まれただろう。

その後すぐにシャワーを浴びた彼は、風呂上がりにアイスをかじりながら、この頃熱心に見ているアニメをテレビで見ながらくつろいでいた。けれど、俺もソファで隣に座りながら一緒に見ていると、くいくい、とシャツの裾が彼に引か

れる。ん？と声をかけて彼の方を見ると、既にいつもとは明らかに顔つきの違う真一が俺を見ていたが、あえて普段通りを装った。

「どうした？なんかいる？」

「っ、いや…。部屋、暑くないかなって、思っ」

「アイス食ったのに？」

「そ…、そう、だね。変だよね」

「風呂入ったからか？麦茶飲む？」

「ほしいかも」

本当はもう俺としたいくなっていそうな表情だったが、まだ今の真一には理性がある。それだと意味がないので、申し訳ないが追い麦茶だ。見えないところでボトルの上下を返して、よくよく薬が混ざるように工夫する。何もかも分からなくなるまでキマってくれないと困るし、中途半端に我慢できた方が辛いだろう。これで更に状態異常を加速させるといい。

俺の思惑通り、悪魔の麦茶を飲んでからは、もっと真一の息づかいが荒くなった。あれ？あれ？と戸惑うように額の汗を拭う姿がエロい。ちら、ちら、とコチラを見ては、自分だけがおかしいのか？と困惑する顔もかわいい。時々何かを言いたそうに口を開くけれど、俺がしれっとした顔でアニメを見ているので言い出せずにいるようだ。

ふむ、なるほど。薬は問題なく効いているようだし、これはもう第2段階にうつってもいいだろう。言いたいことが言えずに困る彼のために、俺からアクション

ンを起こすことにした。ちらりと真一が見てくるタイミングを見計らって目を合わせてから、するりと膝を撫でる。

「なに？今日はやけに見てくんね」

「えっ！？そ、そんなに見てたかな...？」

「うん。欲しがりな顔してた」

「...っ！」

すり、と撫で上げた手で股の間を軽く押せば、既に固くなった真一の熱が手の平に当たる。途端に息を詰める彼が愛らしくて、勢いにまかせてソファに押し倒した。流れにまかせてキスをすれば、それだけで真一の肩がはずむ。明らかにいつもより過剰な反応を見せる彼に、しめしめと心の中で笑ってしまった。

しかしながら、これはあくまで予想していたこと。サークルがあるたび、終わり次第俺の家に押しかけまくって、自分から距離を縮めてきて、しかも告白までしてくる真一は、こう見えて行動力がある。だから俺は、いつもいつも真一に驚かされることが多い。それは今日も例外ではなく、2度目、3度目のキスを真一からねだってきたかと思えば、キスが終わり切る前に、ぎゅうっと俺に抱きついてきた。そして口が離れると、鼻が擦れる距離感で甘えてくる。

「ねえ宗佑君。明日って朝早い？」

「いや？午前中は授業も研究室もないよ」

「そ、そしたらさ。今日、いっぱいしたりとか...、できる？」

うる、と薬に侵された目で俺を見てくる真一は、なんとも露骨なおねだりをしてきた。言葉だけでも心がキュン死しそうになっていたのに、わざと腰を押し付けられて、あやうく暴発してしまうかと思った。もちろんだという意志を込めて抱きしめ返すと、むに、むに、と唇を食まれる。なんだ、そのやらしいキスの欲しがり方は。どこで習ってきたと、こちらも一気にテンションが上がった。

可愛すぎる彼に、俄然やる気がわく。ソファーなんかで物足りた行為ができるわけもないので、急いで彼を引いてベッドに移動した。真一のそれはハーフパンツの上からでも分かるくらい張りつめていたけれど、脱がせると下着がぐっしょり濡れていて、視覚的にもかなり煽情的だ。そして真一はというと、現状起こっている出来事がほとんど媚薬の影響によるものだと分かっていないので、自分の下着を見て顔を真っ赤にしていた。だから俺は、あえて薬の事は内緒にして、あくまで真一自身の期待によるものだと思い込ませることにした。好きな子ほどいじめたくなる心はムクムクと俺の中で大きくなり、つい彼の羞恥をあおってしまう。

「やあらし。真一、いつからこんななったの？」

「や...！ちが、なんか今日、変で...っ！」

「期待しすぎ。濡れまくりじゃん、これ」

「ふああっ...！」

ぬりり、と手のひらで軽く軽く撫でただけでもビクビクと震える真一は、俺のせいでまた下着の色を濃くしていた。それが面白くて、何度も同じ動きを繰り返す。でも、ヒクヒクと内ももが震えだしたくらいで、真一は俺の手を両手で抑え

てきた。その反応を見て、少しいじめ過ぎたかと一瞬反省する。けれど真一は、ぐっと息を飲んでから、わざと俺の手の甲に指をゆっくり這わせてきた。しかも、俺の手にあえて自分の熱を押し付けるように腰を動かして、ずり、ずり、と濡れた下着を擦りつけてくる。それに驚く俺の耳に、別人みたいに色っぽくなった真一の声が届く。

「もっ、と…。触って？いっぱい、してほしい…」

取り繕うことを諦めた真一は、どこまでもあけすけだった。普段はこんなおねだりは絶対にしない。どうしてほしい？とこっちから聞いても、相当焦らしてからじゃないと口にしてくれない。それが、俺が行動を起こすより前に自分から言ってくるなんて。

ビビった。媚薬のおかげとはいえ、大収穫だと思う。でも、媚薬バレしたら次に同じ作戦を使うのは厳しいだろうから、今日したいことは全部しておいた方がいい。あけすけなのは俺も同じだ。だから、今度はわざと焦らすように彼の熱を押してから、いつもの彼では答えてくれない質問を投げてみる。

「いっぱいって？何してほしいの？」

「あ、あ、直接触って、擦って、ほしい」

「触るのはココだけでいいの？」

「んん、やだ、中も、中もしてっ！」

「…えっち」

「んんうううっ！」

言わせたい言葉は、媚薬で理性を溶かした真一からはするすると飛び出してきた。けれど、これはあくまで素直な心の声。真一がしてほしいことを口にしているわけではないので、中も自身も沢山触ってほしいのは、いつも口にしない彼の本心でもある。なんだ、やっぱりどっちも触ってほしいんじゃないか。もう前だけ触るのでは満足できないようだ。俺とする時には大人しい彼の秘密を垣間見る。

お望みどおり下着の中に手を入れてみると、内側はかなりぐしゃぐしゃだった。下着越しでも濡れているのは分かっていたが、実際触れてみると大洪水状態。ローションを使わなくとも、ぬちゅりと音がするくらい先走りがこぼれている。こんなにも濡らすほど我慢していたなんて。逆によくイカずに耐えていたなと思った。

「すっごいぬるぬるになってる。下着気持ち悪いから全部脱いじゃおうか」

「あ、は、早く、早く触って、待てない、もう待てないよぉ...！」

「うんうん、いっぱいしてやるからな」

触ってもらえると分かるや否や、真一はどんどん大胆になった。早く触ってくれと、俺の手を自分の熱に導く。下着を脱ぐ時間すら惜しいらしい。これだけ焦れているなら、あまり待たせるのもかわいそうだ。本当はローションを使ってやらないと痛いかもしれないが、入口の近くなら、彼の体液のぬめりを借りて指を入れられるかもしれない。そう思った俺は、人差し指に先走りを絡めて、ゆっくりと指を中に入れていった。

けれど、ここでひとつ違和感を覚える。確かに下着の中全体が濡れまくっていたので、後ろのすばまりと、その付近が濡れているのは分かる。だが指を入れてみると、なぜかもっと奥まで濡れているのだ。しかも、割としっかり目に。なんなら、体液とは思えない液体で。

おや、と思って、もっと指を進めた。すると中から、にち、にち、と音が聞こえる。奥から音が鳴るほどしっかり濡らすには、少々人の手を加えないと無理な気がする。そして今日、俺は媚薬は盛ったけれど、それ以外のことはしていない。だからもし、ここが緩んでいるのだとすれば。これは真一本人が、自分で犯されるための準備をしてきたことになる。

「な、なあ真一、お前さ...」

「うん、さっきお風呂で、準備してきたから...。もう、入れられる、よ...?」

ここ、ほら、と息を吐きながら、指の入る孔を真一が広げてくる。暴力的とも言える光景に、今度はこっちの顔が火を吹くかと思った。ううわ、なんだよそれ、めっちゃうちゃエロい、かわいい、えっちじゃん、てか入れてほしいって気持ちが前に出過ぎていて愛らしい、等々感情が爆発しそうになる。

真一がシャワーを浴びていた時から、媚薬は既に効いていたらしい。俺の知らないところで、彼はこっそり後ろをいじって用意していたみたいだ。だから、テレビを見ながら部屋が暑くないかと聞いてきたとき、彼としては既にながつり誘っていたと考えていいだろう。なのに俺が追い麦茶をかましたんだ。それは理性が碎けてしまうのも当然だろう。

正直、入れたい。今すぐ入れたい。奥まで犯して何回もイカせたい。でも、媚薬でドロドロにできる機会は少ないはず。だからもう少し堪能したい。いやらしい真一に相当煽られていたが、俺はギリギリで踏みとどまった。そう、俺が媚薬を使ったのは、そもそも真一の本心を知るため。快感で喋れなくなる前に、もっと色々聞いてみたいことはある。

「どうしたの今日。すごい積極的じゃん」

「う…。わかんないけど、さっきからずっと、ドキドキしてて…。宗佑君としたくて、うずうずする。僕、変なのかな？」

「ううん。変じゃないよ。かわいいじゃん、ここうずうずしてたんだ？」

「はううう…ッ！」

広げてくれた孔に、2本目の指を入れる。彼がほぐしたそこには、追加の指も楽々と入っていった。滑り具合を確かめながら良い場所を擦ると、真一は甲高い声を上げてだらりと先走りを零す。けれど、どうしてここまで感じるのか、興奮しているのか、その理由が分かっていない真一は、自分の身体変化に困惑気味だ。なんでこんなに感じるんだろう、どうして中が疼いているんだろうと困っているのに、欲しい気持ちも同じくらいあって、わけがわからないんだろう。悩まし気に眉を下げる顔がかわいくて、俺は内部をほぐしながら、もう少し突っ込んだ質問を試みる。

「今日はいつもよりドキドキするだけ？なんか他に変なことはある？」

「ん、んんっ、あ、いっ、いつも、より...！気持ちいい、っ、な、中、すご、い、あう、指でされたら、んっ、ッ、ううっ！気持ちよくて、良すぎる、くらい、かも...！」

「熱くてトロトロだもんな、ここ。ほしいほしいって、俺の指食べてる」

「ひう、っ、ね、キス、して、もっとチューしたい、宗佑君と...！んう、う、うう、キスしようよぉ...！」

身体の反応が良すぎるくらいな真一は、ビクビクと腹を震わせては、シーツを蹴って悶えていた。その合間に手を伸ばして、足を巻きつけてくる。そのままぐいっと俺を引き寄せて、どうにかキスをしようと顔を近づけるのに必死だ。

ここまでされて、キスを拒む理由はない。俺は彼の希望を叶えてやるために、中に入れていない方の腕を彼の後頭部に回して、そのまま口を付けた。淡く開いた唇の隙間からは、先に真一の舌が入ってくる。俺の口の中を余すことなく味わおうと動く舌を軽く吸うと、こもった喘ぎ声が漏れてきた。

「んんん...ッ！ふ、う、ううう...っ！」

キスだけでも感じるのか、時に身体が跳ねて、口が離れてしまいそうになる。それを抑えながら、下の愛撫も激しくしていく。指を前立腺に当てて、まずはゆっくり上下に。俺の指に合わせて腰が動くようになってきたら、指を増やして、それぞれの指で甘くひっかく。ビクビクッと巻きつけた彼の足が反応した。漏れ出そうな喘ぎ声を吸い込みながら、今度は人差し指と薬指でくびりだした弱点を、

コリコリと中指で弄ぶ。これは元々、真一が好きな責め方。お気に入りのやり方で触ってやれば、とうとう真一は我慢できずにキスから逃げていった。

「ひうっ！！？うああああっ！！だ、め、それはっ...！！あんん、んうっ！あ、あ、やあ、それダメだってばあっ！！」

「そんなに暴れるなって。キスはもういいの？」

「んんっ！で、きない、きもち、よ、すぎてえっ！！ああ、まっ、て、んんっ、んっ、く、る、きてる、ああああダメダメダメっ！！ホントに、だ、め、あ、あっ、ひ、ッッ！んんんんんんッッッ！！！！」

ジタバタと暴れ出した真一は、俺の指から逃れようともがいている。でも俺は知っているんだ。これは真一が、中でイキそうになるのが怖くて取る仕草だと。このあたりは媚薬を使っても変わらないんだと思う。イクまでの時間は、いつもより大分短い気はするが。それでも感じやすい身体は、彼の意志に反して高まっていった。とどめとばかりにぐりりと押し込めば、ひと際大きく彼の腰が浮いて、全身がピンと突っ張る。

「ひ————.....ッッ！！！！っ、は、あ、ああ、っ、っっ...！！」

声もなく中をキツく締めると、一拍置いて、真一の熱からとろりと白い液体がこぼれてきた。どうやら嫌がっても、快感が強すぎてイッてしまったらしい。かなり気持ちよかったのか、真一は何かを喋ることもせず、口を開きっぱなしで呆然と天井を見ている。

そんな彼を見ていると、ついついもっといじめてみたい気持ちがわいてきた。キスもしたいと言っていたし、せっくなので無防備な唇にかぶりつきながら、さっきよりも膨れた前立腺を念入りに撫でてやろうじゃないか。

「~~~~ッ！！？ふっ、ううううっ！！んんうううう
うっっ！！？」

追撃で重い快感が来るとは思っていなかったのか、真一は大げさなくらいに足をバタつかせていた。そのまま背中から回した手で俺の肩を掴んで、ぐい、ぐい、と後ろに引いてくる。離れてくれと念じられているのは分かったが、はいそうですかと終わりにするわけがない。

3本の指で、円を描くようにねちっこく前立腺を撫で続ける。一辺倒な触れ方では飽きてしまうから、時々指を出し入れして、たまに奥を刺激した。ゾクゾクゾクっと背を震わせるのは、今が気持ちいいからなのか、もっと先の気持ちいいことに対する期待なのか。それは真一にしか分からないけれど、とぷ、とぷ、とひっきりなしに彼から精液が溢れているので、気持ちいいことには変わらないはずだ。

「ふぁ、ああああ、ま、っで、宗佑、く、ううううっ！も、そこは、ああ、ダメ、だめええええっ！！」

「してほしかったのに、今度はダメになっちゃった？いっぱいイクの嫌？」

「んひいいっ！？？」

イキっぱなしになっている彼の熱の先端を指でなぞれば、分かりやすく身体全体がしなった。やだ、と暴れて身を振る真一を追いかけては、足の間に手を入れて撫でまわす。時に足を広げてもらえない時は、後ろに入れた指の動きを大きくすれば、どうしても力が入らなくなって真ん中をさらけ出してくれる。ただ、彼からすれば気持ちいい瞬間に、また別の良い場所を触られるわけだ。耐えがたい気持ちよさから逃げても、また別の絶頂が襲ってくる。その快感の追い打ちに苦しんではいたけれど、俺はしつこく追いかけまわした。

「うあああああゝ ああ...っ！！やあっ！もおだめ、許し、て、前はダメっ！ダメだってばああ...！」

「んん、かわいい、どっちもされたら怖い？でもごめん、俺やっぱりやめてあげられない」

「んゝ ～～～～っ！！んあああっ、い、く、ううううっ！あう、おひ、り、らめ、今らめ、あああああ無理無理無理っ！！も、もお、お、っ、～～～
～ッッッッ！！！！」

常に俺が有利になる追いかけてこのせいで、真一はひっきりなしに喘ぎ声をあげてはイキ続けていた。抵抗も段々と弱まっていき、暴れていた手は今やシーツを握るだけになっている。時折俺を蹴るんじゃないかと避けていた足も、くたりと力を失って伸ばしっぱなしだ。それでも彼から放たれるものが枯れないのは、おそらく媚薬の効果だろう。射精を促す成分も入れていて良かったなと、自分の作った薬の出来栄に惚れ惚れしてしまう。

「ひう、うっ、うううう...！ね、もお、やだ、やだあ...！」

「どうした？何が嫌？」

「こ、れ...！もう、やめてえ...ッ！」

俺の下でぐったりとしている真一は、それでも射精に向かい続けているから、ビク、ビクと自身を揺らして、時にイクために身体をこわばらせていた。そんな彼はずびずびと鼻をすすって泣き始めている。おっと、これはいくらなんでもいじめ過ぎたか、そろそろ終わりにしてやるかと、真一の熱を撫でまわしていた手を離した。

けれども真一がぐずっていたのは、なんとイキ過ぎて苦しかったからではなかった。彼の弱々しい手が伸ばされた先は、なんと俺の熱。俺のそれに触れてくる手にぎょっとして真一を見れば、目だけはしっかりと熱をおびていて、まっすぐに俺を捉えていた。

「もう、入れて...！おかしくなっちゃう、早く、欲しいよお...！」

飛び出てきた台詞に、今度は俺が赤面する番だった。なるほど、そう来るのかと、またしても彼の意外性に心を驚掴みにされてしまう。

そもそもこの媚薬には、嘘をつかせて真一をその気にさせる効果はない。あくまで、理性を崩して本心を露呈させることしかできないのだ。だからこれも、彼の素直な要望の一つということになる。

そうか、真一って実はイカされまくっても平気だし、逆に言えばどれだけ指でかわいがってやっても、俺のを入れないと満足できないのかと、言葉を噛みしめる

たびに頬の温度が上がる。男として、好きな相手にこう言われて、浮かれない方がどうかしていると思う。

けれど俺が動かなかったのも、真一は更に焦れてしまったようだ。むう、とむくれた彼は、なんと起き上がって俺を押してくる。よろけて体勢を崩すと、尻をついてベッドに座る俺の足を立てた真一は、ためらいもなく股の間に顔を寄せた。そしてそのままズボンを下ろして俺の熱を引きずり出すと、ためらいなく啜り始める。

「うわ...！ま、真一」

「んん、んっ、ふ、うう...！」

じゅぼ、じゅぼと、音を立てて必死に舐める姿を見ると、どんどん俺の自身が膨らんでいく。こんな風に、真一が自分から舐めることがまずなかったのに、卑猥な音まで立てているときた。興奮しないわけがない。むしろ視覚からも舌からも受ける刺激が強烈だから、ガチガチに張って痛いくらいだ。ヤバいって、あんまりされたら出るってと、慌てて彼の顔を引きはがす。

でも真一も必死で、顔は離れても手は俺の熱を握ったままだった。そのまま手を上下に動かして、張りつめた自身を軽く擦りながら、俺に再びおねだりをしていく。

「お願い、入れて...。これ、早く入れて...っ！」

ブチンと、今度は俺の理性が切れる音がした。思い切り真一を押し倒して、ゴムも付けずに真一の中に自分の熱を埋める。ばちゅん、と音がするほど勢いよく突き入れると、入ったと同時に真一も精液を噴き出していた。トコロテンまでできるのはレアだ。腹にたまった精液をひと撫ですると、それにすら感じた真一が悶えながら中を締め付ける。

「あは...！！は、あううううう...っ！」

「えっちだな、今日は。全部とろとろだ」

「やあ...！はず、かし、言わないでえ...！」

「だってかわいいんだもん。ねえ、さっきみたいに教えて？真一はどうしてほしい？ちゃんと教えてくれたら、いっぱい可愛がってあげる」

絶頂の余韻で頭が回っていない真一は、俺の問いをはぐらかせるだけの余力はないだろう。だからきつと、もっと奥まで入れて、とか。前も一緒に触って、とか。具体的なおねだりをしてくるに違いない。さあ、なんて言うんだ。いつも本当は、どうやって抱かれたかったんだと、彼の次の言葉を待った。

期待を裏切らず、真一は俺にしがみついて、されたいことを言ってきた。ただしそれは、思っているより胸に突き刺さる要望でもあった。

「宗佑君の好きにされたい。僕のこと、気にせず抱いてほしい。今日は全部、宗佑君でいっぱいになりたいって思ってる」

あまりにも大胆なおねだりに、俺の脳は瞬間的に煮えたぎってオーバーヒートした。なんて威力だ。かわいいの暴力だ。ぐさりと胸を、愛のナイフで一突きされた。真一、お前ってとんでもない隠し武器を仕込んでいたんだな。俺は今までよく、こんなにも愛らしい要望を秘めている恋人を抱いていて、呼吸困難にならずにいられたと思う。

いつも恥じらって、言えないよ、宗佑君の意地悪なんて言っていたくせに。まったく真一め。本当は俺の好きにされたいと思っていたのか。しかもちょっと、俺が真一に無理をさせないように抱いていたのにも気づいているようだ。どこでバレたんだと軽く頬をヒクつかせながら、真一に額を合わせる。

「いいの、そんなこと言っちゃって？俺、真一が許してくれるなら、ハメはずしちゃうよ？やだって言われても止めてあげられないかもよ？いっぱいイカせて、どろっどろになるまで続けるてもいいの？」

「えっ！？そ、れは…。どうなるか分かんないけど、宗佑君がしたいなら…。されてみたい」

一応退路くらいは作ってやるかと、自分が相当煽られているのにも関わらず、最後の善意で紳士的に振舞ってみた。それで一瞬ひるんだようだが、真一は念押ししても考えを曲げなかった。むしろ、ドロドロになっちゃうかな、なんて呟いてくる。そういう事を言うせいで、君がいっぱいイカされることになるんじゃないのかと思うけれど、言質は取った。もう遠慮はいらないだろう。

手始めに、入れた熱を一度引き抜いて、それからもう一度奥まで一気に突いてみる。驚きと快感が混じった声を真一が上げてから、腰をしっかり掴んで、大きく前後に腰を動かした。

「ふぁ、あああああッ！んん、深、い、まっ、て、も、もっと、ゆっくり」

「好きにされたいって言ったのは誰？」

「んう、で、も、今日ホントに、感じ過ぎ、て、え、ッ、ああ、だめ、ま、また、はっ、ぁ、うううう~~~~...っっ！」

前立腺を挟りながら進み、奥の壁を先っぽで擦って、また前立腺を刺激しつつ入口付近に戻るのは、元々真一が弱い責め方だ。感じる場所を全部擦られるから、一気にイキそうになって怖い、というのは本人談。それを薬が効いた今行ったせいで、真一はあっけなく中で絶頂していた。きっとそうなるとは思っていたし、イッても動き続けるつもりでもあった俺は、彼の状態を気にせず腰の動きを速めていく。

「ッ、ひ、い、い、いううゝうっ！！！？な、っでえ、あっ、あっ、だ、め、イッ、て、ぁ、ぁ、ぁぐ、っっ！！？ふううう...っっ！！！？」

「は、は、気持ちい、真一、すごいね、またイキそう...？」

「んんんんンゝンっ！！！は、はぁっ、っ、待って、まだ、まだ無理、い、いや、ぁぁ、嘘、こんな、ぁぁぁぁぁぁダメダメっ！やう、んんっ、んんんぁぁぁぁぁぁっ！！」

ぎゅううう、と真一の中がキツくしまって、再び中でイッたことが自分の熱からも伝わった。ビクン、ビクンと彼の身体がひっきりなしに跳ねては、足を痙攣させている。呼吸もおぼつかない真一を見れば、その快感の濃さも、絶頂の大きさも丸わかりだ。

それでも俺は、真一の膝がベッドにつくくらい足を折り曲げて、更に奥まで挟るように自分のそれを押し込んだ。奥まった部分を擦られて、真一の目がこぼれる程に開かれる。は、と息を飲んだ彼の奥で自分の先の部分を回すと、ビキリと彼のつま先が突っ張った。

「んんんぎっ！！？あゝ あ、そ、そこ、はあっ！だめ、許し、て...！お願い、今そこ、されたらあ...っ！」

「やだ。だって俺、遠慮しなくていいって言われてるから」

「〜〜〜っ！！！！ひっ、ッ、あああああううううっ！！やあっ！お、奥、うううううっ！！だ、め、抜いて、ぬい、っ！！！！は、ああ、ああああやだやだっ、イキ過ぎちゃうっ！！止まなくなるからああああっ！！」

「かわいい。もっとイッて？」

「ふあああああっ！！？」

全身が突っ張っては弛緩して、緩み切る前にまたイカせる。イッている間も奥を擦れば、悲鳴にも似た声を上げてまた絶頂へと向かっていく。度を越した快感に、真一は泣きじゃくって首を振っていた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー